

240
48
214

第二輯

督教の本領

基督教を信するの理由

暗路の光

新島襄先生の書翰

人間の自由
偽り者偽り者に欺かる
神は人間と同一にあり

福音の葉

聖き生涯の勢力
六才童子の演説
新約聖書翻餘の由来

家庭の友

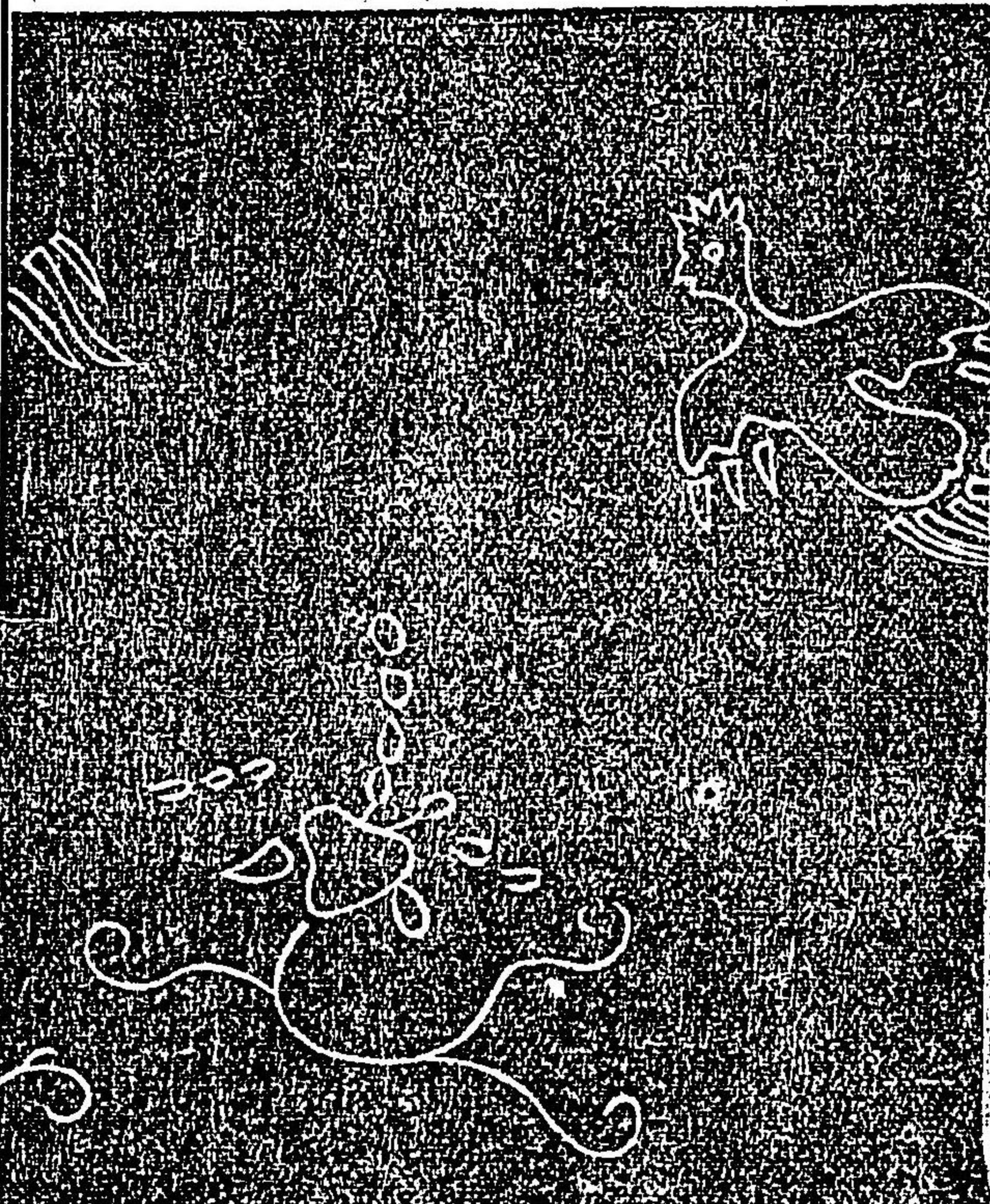
適當なる物
虎勇威を畏る
司馬温公の婦人方徳

一寸一言

質問答義三件



基督教の基礎



一 基督教の本領には

平易明晰に斯教の本義を發揮す。

一 暗路の光には

篤信家の説教。實驗。及び事跡を掲ぐ。

一 福音の葉には

通俗的に聖書の妙趣を示摘す。

一 家庭の友には

小兒の爲め。又母の爲め。面白き短話
教訓を掲ぐ。

一 一寸一言には

基督教に関する質問答義を掲ぐ。

社 告

基督教の礎		
毎月壹回發行		
定價表		
一部	六冊	金四錢五厘
半ヶ年	十二冊	金二十五錢
一ヶ年	十二冊	金五十錢
廣告		共 五十六錢
廣告		共 二十八錢
廣告		共 五十六錢

壹回發行四錢
(五號活字三十字詰)

○本誌は前金を得たる後遞送す
○郵便爲替は麴町郵便局へ御振込を乞ふ

發行所 麴町區上二番町十二番地 霽 月 堂

發賣所 京橋區出雲町一番地 警醒社書店

發行兼 麴町區上二番町十二番地 松尾音次郎

編輯人 牛込區上宮比町四番地 富永寛容

印刷人 富永寛容

一 基督教の本領には

平易明晰に斯教の本義を發揮す。

一 暗路の光には

篤信家の説教、實驗、及び事跡を掲ぐ。

一 福音の球には

通俗的に聖書の妙趣を示摘す。

一 家庭の友には

小兒の爲め。又母の爲め。面白き短話
教訓を掲ぐ。

一 一寸一言には

基督教に關する質問答義を掲ぐ。

社 告

基 督 教 の 發 行 料	每 月 壹 圓	一 部	廣 告	金 四 錢 五 厘	五 錢
	半 ヶ 年 六 冊	廣 告	金 二 十 五 錢	稅	一 十 八 錢
壹 圓 壹 行 四 錢	一 ヶ 年 十 二 冊	廣 告	金 五 十 錢	共	五 十 六 錢
(五號活字三十字詰)					

○本誌は前金を得たる後逕送す
○郵便爲替は廻町郵便局へ御振込を乞ふ

發行所 廻町區上二番町十二番地 齊 月 堂

發賣所 京橋區出雲町一番地 警 醒 社 書 店

發行兼 廻町區上二番町十二番地 松 尾 音 次 郎

編輯人 牛込區上宮比町四番地 富 永 寛 容

印刷人 富 永 寛 容

49
809

發行の主旨

本誌發行の主旨は、穩當着實と信する基督教の本意を平易に、簡明に、積極的に發表して、人の徳を立て、信仰を篤ふするの一助となさんとするにあり。敢て新奇卓抜の論を載するにあらざる。又當今、學者、學生の知識を標的として説を陳べず。國民全体を通じて、實地に基督教を要する。其必要の度に鑒みて、聊か所信を布

明治廿七年十二月

齊月堂主人謹識

基督教の本領

基督教と信ずるの理由

神は唯一なりと云ふは如何。

答 最上至極のものは唯一なるの理と同じ。

此論は日本に於て最上至極の權威を保全たまふ者は天皇陛下

なり故に御一人にて在位が如し。國に二人の天子ある時は其國

必ず亂る。理のゆるさる所なればなり。今夫れ天地萬有を統治たま

ふ。最上至極の實在者は神あり。人間と云はず。畜類と云はず。一切の事

物は皆此神に属す。神の上に神なく。神の他に神なし。若しこゝに神あ

りて。其上に更に大ひなる神ありと云へば。其更に大ひなる神こそ余

が所謂神なれ。もし其更に太ひある神の上に尙更に大ひある神ありと云へば。其尙更に大ひある神こそ。余が所謂神なれ。故に到底たゞあるの外ある可からず。聖書に曰く。汝の神はばは神の主の主ありと。又曰く。神と稱ふるもの。或は天にあり。或は地にありて。多くの神多くの主あるが如しと雖も。我儕に於ては。唯一の神。即ち父あるのみと。されば余が所謂神は。至靈至誠にして。天地の太極。宇宙の最上おまします神あり。豈二あるべけんや。

問 神は人の拜すべきものなりや。
答 然り。固より拜せざる可からず。

我國に於ては。此唯一神を拜するもの甚少。多きは拜金宗の人に。金を何物よりも大切視して。これに禮拜し。つかふるなり。然りと雖も。山の如く。金銀を積み上ぐとも。肝心の生命なくては。何の益にも立ず。某處に餓死の屍ありければ。其懷中をあらためしに。多分の金を

所持せしとぞ。此等は随分愚ある話ありと雖も。蓋し世に珍らしからぬ事ありとす。夫れ神は生命の大元なり。神を信ずるとは。其生命の大元に歸ることなり。神を拜すると。其生命の源頭に浸潤することなり。豈これを忽よすべけんや。讀者或は云はむ。われらは我生命を肉身の親より受けたり。長じて親の手を離るや。我等は我手に稼ぎて。我手に食を調へ。我手に食ひて。此生命を維持り。何んぞ神の御世話にあらんやと。これ實に無分別の甚しきものと謂つべし。成程。わが生命は。わが肉身の親より受けたるに相違なきが如しと雖も。而かも親の了見にて子の出生るものにあらず。若し親の了見のみにて子の出生るものあらば。世に子あくして悲む親は。あらざるべし。幾百万圓の身代を擁へ。あがら之を譲るべき子なしとて。怨みか。かつの族あるは。何んぞや。よし又親の了見のみにて出生るとするも。其親の親は如何。尙其親の親の親は如何と。次第々々に推し尋ね行けば。到底最後の極點

即ち人間最初の第一人に達せざるを得ず。而して其第一人はこれ到底親なくして出生せしものたらざるを得ず。或ハ進化論によりて、最初の人間の畜類より變じたりといふも、其畜類の由來如何と。またまた奥より奥へと尋ね行けば、結局天地万有の大元唯一の眞神に達せざるを得ず。實に神にわれらの大元にして、則ち我肉身の親の親なり。われら如何で此親ある神を拜せずして、人間の道立つと謂ふべけんや。肉身の親にすら不孝なれば、親不孝と謂つて其罪輕からず。況んや親の親たる生命の大元に對して不孝なるをや。又かの食物にしても、我手に稼ぎ、我手に食ふと云ふと雖ども、第一この生命に最大切ある。水、空氣、日光等は、誰が手造せしものなるや。誰れもわらざる可し。これ實に天の恵あり。神の恩賜あり。其他、日常の野菜、穀物、肉類等の如きも、細かに考ふる時は、皆天の助けによりて生るもの。何一物として、人力のみよて出來たるものはわらず。されば此慈愛ふかさ神に對して、如

何で禮拜の誠をいたさずして可あらんや。故に基督曰く、汝心を盡し、精神を盡し、意を盡して主たる汝の神を愛すべし。これ第一にして大ひなる誠なりと。
或人難じて曰く、神を大切に拜すべきは其意を得たり。されど肉身の親を粗末にすべしとの理は在べからず。然るに基督教よては、只神々と謂つて、わが肉身の親を不孝になすと云ふは如何。
答へて曰く、これ決してあるまじき事なり。親不孝にして、如何で神は熱信あるを得んや。神その十誡の第五は、汝の父と母とを敬へと。基督も亦嘗て敬神を名として、其父母を輕んずる信心家を誡められたり。曰く、爾れ神誡めて汝の父母を敬へ。又父母を罵るものは殺さるべしと宣給へり。然るに汝等は曰て、凡て人父母に對ひ、汝を養ふべきものは禮物(神への)なりと云へば、その父母を敬はずとも可とす。斯て汝等は遺傳により、神の誠を廢くせり。偽善者よ。いざや

六
(昔の信神家はよく汝等)に就て預言し。此民は口にて我に近づき、唇にて我を敬へども、其心は我に遠かり。人の誠を教となして、徒らに我を拜すと云へり。馬太傳十五章四一九これによりて之を見れば、父母を敬へどは神の誠なり。故に父母に不敬なるは神の誠に背くことあり。父母に不敬にして、禮物を神にさへぐども、神決して之を受け玉はず。所謂口と唇にて神を拜し、其心にて拜せざる偽善者なれば、徒らに我を拜すとありて、斯る信心は全く無益なるを明白に教へ玉へり。もし基督教を信すと云つて、此明白なる誠を破るものあらば、これ取も直さず。基督教を破るものにて、名の何たるに關らず、決して神を信する者あらず。保羅(基督の弟子)曰く、子なる者よ、汝等主にありて(基督を信じながら)兩親にしたがふべし。これ合宜ことなればなり。汝の父母を敬ふべし。約束を加へたる誠は、之を首とす。これ汝が福を得、また地の上に壽長からん爲あり。以弗所書六章一一三其他孝行

七
に關する教訓いと多し。されば基督教を信するによりて、肉親を敬はざるに到るなど、は實に跡方もなき誣言にして、探るに足らざる話なり。以上は只基督教の教示る教義を擧たるのみあるが、今少しくこれを普通の道理より論せんに、元來基督教なるものは、心の罪惡を根治して、之を全きものとなし、至聖、至善なる神の前に立つとも、決して耻る處なきに到らしむるを目的とするものなれば、固より不孝不義てふ如き大罪をゆるすべくもあらず。たとへば白晝の中に暗夜の混入可からざるが如し。故に熱心ある基督信者の中には、必ず熱心ある孝心の者あり。忠臣は孝子の門に於てすと云ふ如く、孝子は熱心の信者の中にあるべし。これ實地に照して最も明白なる事實ありとす。もし基督信者と言ひながら、親不孝の行ひあるものあらば、これ決して信者にあらず。其信仰は、とくに惡魔に奪ひ去られて、墮落したる偽信者なり。これをよく辨へざるべからず。

或は再び難じて云はむ。聖書の中(馬太傳十章三四―三七) 夫れ我(基督)を指す來るは。人を其父に背かせ。女を其母に背かせ…… じんが爲めなり。我よりも父母を愛む者は。我に協はざるものなりと ありは。これ親不孝を教ゆるものにあらずして何んぞやと。 答へて曰く。これ決して親不孝を教へたるものにあ らず。教を守ること堅忍不拔なるべきを教へたるも のなり。書を読むに。前後の關係を知ざるべからず。之を知る時は 此聖語の明白なる意味を解するに難からざらん。夫れ人間世界は何 時も太平無事あるものにあらず。時としては非常無道の場合起ると あり。假令ば親として子に正義をなせ。善道を踏めよと命ずるは通 常にして。これ太平無事の時なりと雖も。もし其親にして不幸にも 貧苦に迫り。子よ命じて盜をせよと強ることありとせよ。これ非常無 道の時なり。此る非常の時に當りて。たとへ親の命ありとも従ふべ

きにあらず。斷じて之に反對し。飽くまで正義を取つて守らざるべか らず。これ大義親を滅すといふものにて。天地の大義公道を破るよ到 りては。最早肉縁の情にひかるべきにあらず。こは何人と雖ども其理 を疑ふ能はざるべし。さきの聖語は即ち此る場合を指せるものなり。 其理如何となれば。若し親の命あればと謂つて。天地の正道を犯して 盜をなさば。結局己れ一身に大罪を負ふのみならず。己が親にも更に 一層重大ある罪を負しむる。非運となり。孝せんと欲して却つて大 不孝に陥に到ればなり。是豈子たる者の忍べき事あらんや。之に反し て。よし親の命ありども。不義非道はなす能はずとて。一時の不孝を忍 びて斷乎たれば。畜己れ一身を罪より救ふのみならず。其親をしも 不義の大惡より救ひ結局永遠の大孝行とある。これ非常の場合には 止むべからざるのことなりとす。それ基督が我よりも父母を愛むも のは我に協はざるものありと宣ひしは。其父母不幸にも不義非道を

勤むる場合に於て。大義公道を主旨とする我教を堅く守り。決して一時の情にひかるべからず。もし左る事あらば決して我心に協ふものにあらず。そは己一身を滅するのみならず。併せて其親をも滅せばなりとの仰なり。何んぞ不孝を人の子に教ゆと云はんや。非常の場合に處するは。非常の覺悟なかるべからず。其覺悟をこゝに示されたるのみ。基督教の本意は。徹頭徹尾。孝親を勤む。信神は決して孝道に背くものにあらず。此理よく得心せらるべし

問

神を拜するの道如何。

答

聖書よ曰く。神は靈なれば。拜するものも靈と眞を以て拜すべしと。

靈と眞を以て拜するとは。虚偽虚偽なき眞心をもて。禮拜すとの意あり。それ虚飾をもて神を拜するは。猶眼を蔽ふて物を見んとし。耳を壓へて聲を聞んとするが如し。決して其甲斐ある可のらず。然るに目下

世間に行はるる信心の様を観る。多くは外面のみに走りて。内心を顧みず。口に念佛を唱へながら。手に人の物を掠め。社前に立ちて拍手合掌はいと殊勝あれども。歸路に喧嘩口論。はては命のとりやりに及ぶは。言語同断なり。譬へば。底なき袋に物を入るゝが如し。一方よりセツセと信心をつめこめば。一方よりセツセと信心の漏れ去るあり。又かの御祭禮と稱ふるものゝ如き。徒らにぎやうくしく騒ぎ廻りて。風俗を亂し。酒に酔ふを以て第一の樂とするなど。これ神を祭るにあらずして。わが口腹を祭ると云ふものなり。されば管公の歌にも「心だに誠の道にかなひなば。祈らずとも神やまもらん」とあり。以て心の中に誠もなくして。たゞ外形のみの信心を深く誠められたり。されば基督も亦。當時信心の道をとろへたるを嘆せ玉ひて。噫汝等禍なるかき。偽善なる學者とパリサイの人よ。汝等ハ白く塗りたる墓に似たり。外は美はしく見れども。内は骸骨とさまぐの汚穢にて充つ。此の

如く汝等も亦外は義く人に見れども内は偽善と不法よて充つと仰せ玉へり。誠に唯今の我國情に適切なる金誠と謂つべし。神の靈なれば其前に立ちては。一物も隠るべきあし。人間は丸で赤裸の儘にて心の隅々までも見すのされをるあり。然るに外に美服をかざりて。其内を蔽はんとするが如き。所謂頭かくして尾かくさず。耳を壓へて鈴を盗むの類たけと云ふも愚なり。故に神を拜するの道たゞ淨清無垢の真心にあり。

問 答

真心さへあらは。別に神を拜せずともよきにあらずや。否な。拜せざる可からず。其真心は。神を拜するによりて初めて立てはなり。世に管公の歌を生かむりして心だに誠の道にかないなは。神信心は無用なりなを唱へて。基督教を蔑視する族ありと雖も。これ大ひなる僻事なり。なる程。心だに誠の道に合ふならば。こ

れに優るの善はなけれども。其心が誠の道に合ふと云ふこと。なか／＼神の助によらざれば多と難と。口先のみの誠ならば。いとやすけれども。實地心の奥底より誠道に合ふと云ふことは。なか／＼容易なるものにあらず。彼のたやすげに。心だに誠の道に合ひなは。神信心は無用なりなを申すが。そも／＼心は誠なき証據なり。むかゝ孔子の如き聖人すらも。道の修らざる。學の講せざる。これ我憂なりと仰せられたり。況んや凡人のわれ／＼に於てをや。これが誠の道やどの事すらも。我意盛なるわれ／＼には分り難と。況んやこれを一々守るに於てをや。故にわれらの神を拜するは。先づ第一に其光明によりて。己の我心を照破され。以て誠道の何たるを知らされ。之を知らざると

共に。これを守るの方をも授らんとて。則ち神を拜するなり。加之人の神を拜するは。水の卑につくが如く。火焰の上に飛ぶが如し。自然の性なり。故によと心よ誠道を守り得るとするも。尙神をは拜せざるべからざるなり。

問答

神を拜するによりて。真心の立つ理由如何。聖書に曰く。凡てわれら帽子なくして鏡に照すが如く。主(神)の榮を見。榮に榮いや増りて。其同じ像に化なりと。

此義を説んに。われら神を拜すべしとの信心起らざる間は。顔に帽子をかけて鏡に向ふが如く。神の神たるを認ると臆なり。然るに一旦信心の念起る時。恰も素顔にて明鏡に向ふが如く。神の御榮光を歴然と拜し。信心いよ。堅固なるに従ひ。其御榮光を拜すること。いよ

明らかなり。竟に此身此儘が神と同じ像とあるの意味あり。譬へば君子徳行の人と常に其起臥を偕にし。常に其感化にあつる時は。遂に其者の氣質風采容貌までも。其君子徳行の人に相似るが如し。むかし摩西。西乃山よて。四十日。四十夜。神に拜事へ。親しく其御榮光に接してのち山を下りしに。其麓にありし。いずらえる人民は。仰ぎて其顔を見る能はざりしと云ふ。神の榮光の摩西の顔に輝き居たれば。亦り。創世記第五章一節に曰く。神人を造り玉ひし日に。神に象りて之を造り玉ふ云々と。然らば神のをもかけは。元來人間の衷に在るものなり。しかるに我等慾心に惑ふて。其明德を發揮せざるが故に。折角の神象も終に其正体をあらはずに由なく。空しく深海の玉の如くに埋没す。もし之をして神を認めしめ。其大元の靈に相向ふを得せしめば。水と水と相引くが如く。鏡と鏡と相照すが如く。燦然として。こゝに其光明を發せん。これを人の真心といふ。摩西の顔のからやきしは。則ち衷

なる神の像が外なる神の像に照されて。其同じ像に化れるなり。嗚呼
人の真心神と相對して相感應するより大ひあるはなし。其理最も明
白なりと謂つべし。故に曰く。人の真心は神を拜するによりて初めて
立つと。

だびでの詩に曰く。愚なるものは心のうちに神なると
いへり。彼等は憎むべき事をなせり。善を行ふものなり。
えほは天より人の子をのぞみて悟るもの。神を尋ぬる
者ありやと見たまひしに。みな逆き出て盡く腐れたり。
善をなすものなり。一人だになし。不義を行ふ者は智覺
なきか。かれらは物食ふ如く我民を食ひ。又ほはを呼
ぶことをせざるなりと。



暗路の光

新島襄先生の書翰

余明治二十二年秋の頃より病癖にかゝり。荏苒いえず。志
のみ盛にして身これに随はず。憂鬱殆んど禁する能はざ
るものありき。當時先生の手書に接する毎は。暗夜に燈を
得るの思ひあり。大ひ慰藉を得たり。左に掲ぐるは。其中
の一編あり。

本日貴書に接し。當時京都にて御病氣御再發の
由承り甚驚入申候。小生も先日明石に罷越し候
は一は安息日を明石の兄弟と共に守り候へ共

其貴兄弟に御面會致度存意に候ひとに豈圖らん其前日御歸村のよににて甚残念に奉存候私共去十九日垂水(村名)を去り同二十日當地に參り申候今朝貴書に接し○○○○○○○○御病氣とあれは不得止事なり道中も長く有之一ト先明石に御歸り御攝養ありて再び御平癒の上○○へ御越被成方可然と奉存候御病氣を押し○○○○の上も來人多分にて御休息は六ヶ敷かるべしと存候間一ト先退軍充分銳を養ひ御出陣被成候ては如何又御病氣にて種々心中の憂鬱に堪へざる所もあるべく候へ共決して御

失望あるべからず失望は失敗の基たるべし如何なる困難前に横るも太膽不敵從容として天父の御手に任せ Child of Providence (天命の子と云ふ義となり靜に前途の策を御立可被成候先は爲御見舞如此候也勿々貴答

八月廿二日

襄

音次郎君

尙々小生も病氣の爲め幾回か失望せし事も有之候間必らず失望宗のフレンド(朋友との義)と存候故に貴君の御心中よく推察申上候然と決して失望あり賜ふ勿れ天父の攝理は却て貴

君の失望中に成熟するも難計。八重よりもよ
とく申上候私共歸宅も本月中にあらざれば來
月の初なり

人間の自由

さて人間の自由てふ問題を研究せんとするに當り、先一通り觀察すべ
きは自由の反對説則ち人間には自由なしといふ説にうある古より今
に至るまで、此説の綿々として斷ざるは、最も著明しき事實にして、其言
ふ所を聽くに、世の中は升もて量りたるが如し、一升のものは何處まで
も一升、一斗のものは何處までも一斗なり、烏は何處までも烏、鷺は何處
までも鷺あり、豈荆棘より無花果を探り、あざみより葡萄をとる事を得
んや、こは既に定まりたる因縁なればなり、人間が幾等彼もすべし、斯も
そべしと工夫すとも、さて實地に臨んでは、其思ひ決して通るべくもあ
らざるなり、是れ成る様としか成らざるものにて、人間が望みを立て

好き嫌ひをいふも、畢竟無益のくだことたるに過す、蓋し天の定めし定
法は、好き嫌ひによりて如何ともなし難ければなり、夫れ人間には元來
好き嫌ひの撰みをあし、其好きなるを採り、嫌ひあるを棄つるの力ある
となし、否が應でも死すべき場合には死せざるべからず、生くべき場合
には生きざるべからず、人を殺すも、我身を割るも、皆これ約束事にして
初めよりの定業なり、其証據には、統計表を見るべし、近頃統計學の開け
て以來、世は誠に便利なること、なれり、統計上より算當を立つる時は、
明年には日本に幾人のものが死、幾人のものが生るといふ事も、預言せ
らるるあり、婚禮が幾個、離縁が幾個、取り行はるといふことも、預言せら
るるあり、人を殺す罪人が幾人起り、身を殺す狂人が幾人起り、且一年中の
何れの時節に如何なる刃物をもて何れの階級のものが爲すかと云ふ
事までも預言し得らるるなり、即ち既往幾年間の實際に鑒みて、明細に計
算を立つる時は、大抵將來の事も、予測し得らるる、譯合たるあり、而して

その此の如くなる所以のものは、人間に自由を以ての証明たるに外を
 ることなし、ろはもし人間にして自由あらんか何を以て人生の現象に、
 爾かく定數あることを得んや、尤も人の婚禮するや、婚禮すべしと自ら
 決心し、其離縁するや、離縁すべしと自ら決心し、人を殺す者も、腹を割る
 ものも自ら決心してなすが如きと雖ども、其實、人間は自ら決心するの
 自由なきものあり、好き嫌ひを定むるもの自由なきものなり、唯止むに
 止まれぬ自然力の支配下にありて、以て器機的に云爲するに過ぎざる
 のみと、

今此説を何氣なく聞くときと、一應尤もらまなく開ゆる節もあきにあら
 ずと雖ども、一步踏み入つて調ふる時は、表裏の兩面ある物品を、唯その
 片面のみを見て價積るが如し、其見足ざるものあるや當然なり、
 そも、人間世界の出來事中、其大多數のものは實に古來の風俗、當今
 の流行、及び其家、其人の習慣等によりて、知らず、ハッと思へば事こ

れに随ふといふ如く、思慮分別を待すして、其身の情力に驅られて行ふ
 もの甚だ多し、目に塵の入らんとするや、臉先づふさがり、手亦これに従
 ふが如き、坂道を車にて乗り下るに、下り終りたる後までも、車夫の尙走
 るが如き、皆これ物の情力を示すものあり、而して人は則ら此情力によ
 りて、毎日の出來事を處すること甚だ多きあり、日に三度の飯を食ふよ、
 誰れか一々思案し、一々分別して而る後、食ふものあらんや、病氣若くは
 他に異常のことあらざる限りは、食膳に向へは直ちに箸を採ること、殆
 んど器械の動くに異あるとなし、又官吏からは其出勤時間の來るや、時
 計を待たずして、自然に飛び出し、大工、左官、木挽、其他の職人ならば、其定
 まつたる職業を探るに何の猶豫もあることなし、毎日の仕業をなさん
 ど、もるに、一々分別を呼び起して、これを定むる者は少なかるべし、余輩
 が嘗つて學校にありしや、五時半を寐起の時、十時を就寐の時と定めら
 れたり、初めは甚だこれを難んせしと雖ども、後終に習慣となり、五時半

来れば必ず眼覺め、十時来れば必ず眠を催すに到りし、其様全く器械と異なるとも、かりき言ひ更れば、自由の判断力、分別力を呼び起してこれを働かしむるの必要を感せざりしあり、随つて其云爲する處は、必至的にして、自由的のものにはあらざるあり、去りながら此る事例よりして、人間に自由をしなせよの論を立んとするは、以ての外と謂つべし、そと此は是れ、自由なきの証據にあらずして、自由を用ひざるの証據のみ、譬へば一心音楽に聴き惚れ居る人に向つて、兎角の話を仕掛るも聞きとらざるが如し、元來彼の耳はきこぬざる耳にあらずと雖ども、他の事物の爲めに遮られて、また其聴力を他に働らかす能はざるを如何せん、その盜賊、人殺し、火放け、其他の犯罪をなす者の如き、初めの中、随分善惡の分別も出しなれど、後には惡を爲るが習とあり、性となり惡の奴隷となりたりて、全く惡の爲めには器械的の運動をなすに到れるものなり、最初は自由の分別力を呼び起して、惡をなすにも遲疑して之をなせし

に相違あしと雖ども、後だん／＼度重なるに従ひ、自由引込み、必至はひこり、彼の獄窓につながらる多數の犯罪者の如きは、今や既に自由はあれども無きが如き様、陥れる者あり、されは此等の罪人の統計が豫とめ立てられ得べきは當然の事あり、然りと雖ども、これ等一種の人間を標準として、人間は凡て自由なしといふは、アフリカの黒奴を見て、人間人皆黒奴なりといふと同然の事あり、豈通論といふ可けんや、之を要するに、人間社會、日々の出来事は、十に八九は習慣的、器械的に行はるゝものあるが故に、これに對えて統計を立つる事を得るは、決して怪むべきにあらず、さればとて其統計によりて人間の自由を否むべくもあらず、以上の理由あるが故に、人間の自由といふ第一義は、情力、習慣力を離れて、新に分別を立て、判断を下さいるを得ざるの場合に於て之を見るを得べし、例は使徒パウロの事に就て云んに、彼は習慣的に基督教を耶教なりと思す、まじ其習慣の情力に驅られて、恰も器械の廻が如く、われ知

らすクリスチャンを迫害せし終にダムスコの町近く到りしに、忽焉天より光あり、彼これに打れて馬より落ち、心こゝに驚ける時、パウロ、何故われを迫害するや、との聲をさけり、パウロ更に驚きて主よ、汝は誰なるや、と問ひし、我は汝が迫害どころのイエスなり、おんち刺ある鞭を蹴るは難し、との答を聞き、パウロ積年の迷ひ一時に晴れ、主よ、我に何をなさしめんとし玉ふや、との一言と共に、此瞬間に於てパウロ従來の情力は全く破れたり、新らしき分別を要し來れり、則ち自由力の働き初めて現れたり、爾後パウロは新らしき人となれり、見るべし人間の自由は生涯中の新事件、新分別を要するの場合に於て働く事を、大抵人間は、年齢の段落、親子の死別、我身の病氣、其他非常なる不幸、災難、若くは幸運、吉事に逢ふの場合に於て、著るしき變動を其心事お來し、全く新らしき人間となり得るものあり、もし人間に自由力なく、鳥は何處までも鳥にして、鷲は何處までも鷲あらんに、何を以て斯る變動を來す事を得ん

や、而して管にかゝる大事に於けるのみならず、平生の小事に於ても、器械的又は習慣的作用にて事とせし、新たある分別判断を要する場合に於て、ハ、則ち内よりの情力、外よりの刺激を、呼び止めて、黑白是非の撰みをあすなり、此撰みをなすの力、之を人間の自由力といふ、且又人間に自由てふ思想のあるは、取も直さず自由のある証據あり、如何となれば、草木の如き元來其性分に於て自由なきものは、わか身の自由なきことすら感ぜざるべし、況んや自由のあることに於てをや、其他人はをのゝ責任を感じるの思ひあり、わがあしたる事は、われ其善惡の報ひを受けざるべからずとの思ひは、何人にも其心底深き所に刻みあり、これ亦人間自由の一証據ありと雖、ども、くたくしければ茲に贅せず、さて人間の自由に就ては一通りの理由を述べたりと信ずれども、是れ而しながら余が主として眼指すの論点にあらず、余か論せんとする處は、われ此自由力を以て、此人道を全ふすべしと分別を定むるも、兎角内外

よりの妨を受けて思ひに任せず、所謂窮屈の二字を免るゝことを得ざれば、如何にすれば果して其窮屈を脱れ、すらくとして自由に大道に進むことを得るやとの点にあり、他言にて云へば、善に進むに自由自在、よして、決して悪に迷はざるゝの憂なき自由といふにあり、而してこれ實に人間自由の目的とするところ、真正の自由とハ此事あり、眞理は汝等に自由を得さすべしとあるは此自由あり、善に進むに自由、からんと欲する者は、善の奴隷とからざるべからず、善は活潑々の神明あり、聖徳全き天地の父あり、萬物の母あり、此天地の父母たる神明によりてまづ己が悪の奴隷たり、器械たる事を認め、全く其くびきを脱れて、新た至善なる活る神の前は跪き、全心全力を捧げて活ける供物とあし、己を忘れりて神を性とし、習とし、以て善に進むの情力を得て、こゝに初めて窮屈てふ思を脱するを得べし、「イエス、キリスト我儕を解て自由を得させたり」とは此自由なり、「我儕己に由て何事をも思ひ得るにあら

ず我儕の思ひ得るは神よれり」とは此自由あり、一言これを蔽へば、自由を通して必至に到れるの自由、これを道を行ふの自由といふ、窮屈とは自由と必至との相調和せざるより起るなり、然らば自由と必至と相調和して、自由を通して必至に到れるの自由は、即ち窮屈なく、六ヶ敷なきあり、人間の自由が神の必至に従ふに到つて、こゝに初めて眞正の自由あるなり、

偽り者偽り者に欺さる。

伏見の兩替屋毎日京へ上るに、或時みちにて老人らしより呼かけ、其方は落しはせぬかとて金判一枚みせけるを過分なりとて頓て取てゆかんとするに、老人が曰く大分のものを拾ひまいらするに、せめて酒ばかりを得させよ、もし欲を思ふ某ならば、飯さぬとていかにせん、と理を盡して云しかば、誤りたりとて金一分あたへし、同類のものども往來の人の如くにもてなし、一枚の金をわづか一分には誰も買たきものと

口々に云しかば、金一兩とらせて互におかれにけり、兩替屋件の金判をとりいだし見れば、贖金なり、併はだしぬかれたり、如何にもしてかの者をとらへんと心掛けるに、頼の程道にて行合しかば、とらへて遁さじといふ、彼者この思ひがけなき事かな、先度の金は其方がをとしたるにはあらずや、汝ころにせ金つかいよと逆捨くはせければ、兩替屋理につまり、後には却て詫言なし、剩へ出を金して埒明侍りじあり、盗人に負をうつとは、かやらの事にこそと、人々いひあへり

基督曰く。汝等が人を量ごとく。己も量らるべし。仰向いて吐く唾は必ず落ちきたりて身を穢す。孔子も自悔りて後人これを悔り、自毀て後人これを毀ると云へり。

神は人間と同一に在り

我を遣し、いもの我と同一あり、父は我を獨をき王はず、そ

は我常に彼の心に適ふ事を行へばなり、(約翰傳。八章、二十

九節)

毎度人の申す如く、實地經驗の證據は強いのはい、たゞ人の話を受け賣りする計りあては眞實人を感動することは出来ませぬ、譬へば受け賣り話は掌に釘を當附けられるが如く、かれども、實地經驗よりの話、其釘を金鎚もて打込まるゝが如くであります、只口上計りの教誡は我等に如何なる事をせねばならぬかを示すのみなれども、實地經驗よりの教誡は、其せねばならぬ事は、則ちなすことの出来るものあるを示します、譬へば、清き水の如し、其れを鏡として我姿の汚點を知り得るのみならず、其水にて直ちに其汚點をも洗ひ去ることが出来ませぬ、實地經驗よりの教誡は、鏡とありて我等を照すのみならず、我等をして奮然起つてわが罪過を改めしむるの力があります、偕其實験とは何ぞと尋ねば、其人が實際にもつて居る意識に外なりませぬ、意識とは、其人が

現在胸の中に貯へて居る中心の覺悟であります、聖書を讀んで最も注意すべきは、基督の有ち玉ひし中心の覺悟を知るにあり、其眞理と恩愛に満てる言行は、悉く此中心の覺悟より出でたるもにて、所謂一言一行悉く肺腑より出でたるものであり、今此に題詞として掲げた

我をつかわししもの我と同一にあり、父は我を獨遣き玉はず、そは我常に彼の心に適ふことを行へばなり、

とある三句の如き實に最も我等の翫味すべき所と存じます、(第一)我をつかはしし者我と同一にありとは如何なる事かと云ふに、我をつかはししものとは神を指すあり、天地萬象の主なる天の神を指すあり、此神は、體に我と同一に在すありとの意識を、基督は其中心に有ち玉ふたのである、此胸中の意識即ち實驗は、基督全身の勢力と生命であつて、此生命あればこそ、其教へ玉ふ處正々堂々として、聞くものをして、學者の如から

ず、權威あるもの、如くなり感せしめたのであり、又通常人の目より見れば、まるで敗北の絶頂とも謂つべき時に際して「されを懼るゝ勿れ、我既に世に勝てり」との凱歌を發ひ玉ふたのであり、夫れ我等にも、亦此實驗を有すること最も大切なり、我等果して之を有するや、悲ひかを我等信仰の弱きよりして、此實驗が甚だ乏しい事を感じます、我等は怨のため、惑ひのため、我儘勝手のために神を遠くに居ますが如く、又有や無やの間に居ますが如く感ずるものであります、是れ實に我等の大惑あり、則ちをほまほひであります、神は常に影身に添ふて、我等と共に在すに相違ないのである、むかし一人の老婆は、孫を其背に負ひながら、孫はいづくも尋ねしと申しますが、今の我等は、在まさいる所なき神を認め得ずして、神はいづくも尋ねさまよふのであります、譬へば船に乗りて居ながら、海岸の景色に心とられて、其船を忘るゝが如し、神の大船の如く我等を乗せ玉ふあり、神の守護を確信して疑はざれば必ず

安全の彼岸に達し得らるゝものを、兎角眼前の虚偽思想に惑はされて、遂に慈海の深底に陥るぞ、人間の浅ましき常であります、よく、本心に歸らんければなりません、基督が我をつかはし、者我と同じにあり、憐れに其中心に實驗し玉ふたる如く、われらも基督に由りて此實驗を得ねばなりません、此實驗を得る程次第に熱心に神に事へ、熱心に神に事へる程次第に此實驗が強くなりて参ります(第二に我等の注意すべきは「父は我を獨をき玉はず」との意識であります、これは神われと同じにありとの事を、其反面より確かめられたものであります、基督は神を父と呼んで御座る、則ち親なり、親の心に子程愛いもの、決してない、愛ても起さても、子の事を思ひ通してある、子の爲めには、己の身を粉骨碎身にするをも厭ひませぬ、親の恩愛程、子に對して深切至極なるものはありませぬ、其深切の至極を移して、基督は神と我身との關係を言ひあらはし玉ひ、また、夫れ神は父が子を思ふよりも、一層切なる思ひをもて吾

我を愛し玉ふなり、其父なる神が、ドウして敵の中にわれ獨り遣き玉ふや、決してをき玉ふ筈がないと、断じて覺悟をさめて御在るのであります、則ち我をつかはし、もの、我と同じにありとの一句と合せ見れば、神はたしかに我と同じに在ります(正面決して在さない筈があい(反面)と正反面より確かめられたのであります、譬へば正面は金鐵をもてかため、反面は磐石をもて疊みたる砲臺の如し、基督の神われと同一なるの覺悟は、万古不拔と謂はねばなりません、(第三)は、それは我常に彼(神)の心に適ふことを行へばなり、との意識(覺悟)であります、が、實に洪大無邊といふも愚かなることであり、基督の心は日本晴の如し、微塵だも曇氣あし、常に神の正しき御心に適ふこと、計りを行つて居ると、確く實驗をもつて御在るのである、それ神の心に適ふ、實際の行ある時は、いくら口計りで神々と云ふとも、決して、神我と同一なるの覺悟を有つことは出来ませぬ、親の命令に背きたる子が、われから親に遠ざかる(親は相變ら

す子を愛すれどもが如く、本心よ背き、神の御旨に逆ふ事を行ふ者は、決して神我と同ありとの意識を有つことが出来ませぬ、譬へば清水の中よ濁水を混るが如し、濁水入り来る時は、清水は決して其清さを保つ事能はざる如く、神に背く行をなす時は、神我と同ありとの意識を決して有つ事が出来ませぬ、而して神の心に適ふ行が神我と同ありとの意識を確むる如く、神われと同なりとの意識も、亦神の心に適ふ行を確ます、故に

我をつかはししもの我と同にあり、父は我を獨をき玉はず、そのわれ常に彼の心よ適ふ事をなせばあり」

とある三句を一つに約めて見れば、金鐵と磐石をもて堅めあげたる砲臺に精練至極の大砲を据たるが如くであり、如何なる大敵攻め來るども、決して之を移す事は出来ませぬ、基督は即ち此不抜の大意識、大覺悟、大實驗を有ち玉ふたのであります、それ故に世界中の罪惡を敵と

して少しもひるまず、我すでに世に勝てりとの凱歌をあげて、正々堂々と進み玉ひました、ア、我儕も貧苦の敵、病苦の敵、愁の敵、罪の敵、死亡の敵、等數限りなき大敵にあたりて勝ち通さねばならぬ、運命をもつ者ではありませぬ、然らばよろしく此大砲臺によらねばありませぬ、大警臺とは何んぞや、基督の有ち給ひし大意識、大實驗、則ち「我をつかはししもの我と同にあり、

父は我を獨をき玉はず、

ろは我常よ彼の心に適ふ事を行へばなり」
どの大覺悟であります、何卒我等基督によりて、此大丈夫なる覺悟を得たいものと思ひます

聖き生涯の勢力一名聖あんでれの模範 アンブラー

若し人あり、主基督と眞の親交をなす時は、如何しても彼(基督)に他のひ

とくを導かざるを得ざるに到る。主はこれ以て彼を信するもの
 起る。必至の結果として約し玉へり。約翰傳七章三十八節に曰く。我を信
 するものは聖書に録し、如く其腹より活水川の如く流れ出べしと。聖
 徒あんでれーは。主を求めし最初の弟子の一人として。其第一の起り
 じ感覺は。行きてわが兄弟の西門に告るにありき。夫れ眞に改心たる者
 の其信仰をかくさんとそる。實に不可能の事あり。彼必ず基督に就
 て己が知りたる丈のことを他に告ん。これ止む可からざるに出づ。故に
 もし人ありて。同じ一家族に生活あがらる。兄弟に向ひて。少しも彼の
 救主のことを告す。すれば。吾人は酷く其人の眞基督信者なるや否や
 を疑ふ。すべての基督信者は。或特別の關係を。或特別の人。に有つなり。而
 して恰もあんでれーがまづ其兄弟西門に告ん爲めに撰れし如く。君も
 しくは余は。他人の決して代理すべからざる。特別の人に對して。基督の
 事を告ん爲めに撰れしやも計り難し。われら基督教の傳播は。大ひに個

人のはたらき。による事を記憶せざる可からず。而して丁度連鎖の一環
 を失ふによりて。其全体のされとくになる如く。耶蘇のためは。且
 かざるべからざるの其時に當り。かたらず。又はたらかざるによりて。我
 宗教の勢力を弱むること少しとせず。且又男女にかゝはらず。他と議論
 をなし。教理をどきわかすのみにては。何事をもなす能はず。彼等は自ら
 省みて。自家の改心を眞實にせざるべからず。而して其心の源泉さよま
 るは。よりにて。初めて生命の水は。他に溢るべし。あんでれー及び他の使徒
 たちは。先づ第一に自ら耶蘇に往き。耶蘇と同にありし。のち初めて彼を
 (耶蘇) 他に告んとて。出て往けり。
 もし我儕。他人を基督に導きて。まことの善を。あさんと欲せば。われら自
 ら改心の深き實驗をもたざる可からず。而して信仰と聖靈にみてる人
 となりてこそ。初めてよく其朋友と憐人を助けて。耶蘇を知り。且之を愛
 するに到らしめ。能はむ。あんでれー其兄弟西門を主に導くは。よりて。彼

自ら主の爲めに尽すよりも一層大なる働ある人を助けたり。時どし
てはわれらが基督に導きし其人によりてわれら自らよりも一層大ひ
なる働をあさるゝ事あり。ばるなばは聖保羅に右の手を與へて親交を
結べる。他の人々の彼を信けざりし時に(使徒行傳九章二六、二七故に保
羅後に到り。他の人。殊に聖路加によりて。路加福音書。使徒行傳を著し
たり。然らば我等をしていよく)聖あんでれ一の足跡を踏んことを勤
めしむよ。

福音の棗

六歳童兒の演説

井上文慈郎

あんぢら聖書に永生ありと意て之を探索。この聖書は我に
證する者なり(キリストの語、約翰傳第五章三十九節)

童兒の喜で演説せしものを左に記さん、曰く、

諸君よ、これは聖書でござります、これは神様の書物で御座ります、大
さう美麗です、花よりも猶更きれいです、大さう好い香が致します、大
香よりも猶更好い香が致します、曷日までも美麗です、いつまでも
も好い香がいたし、升即ち其れは心の中でござり、升、その意味を詩で
吟じましよう、

一語も亦ひらく千萬の心を、

尋ね來つていよく、覺ふ妙途の深きを、

花には衰ふる色なく、香には老ふるなし、

筒は是れ自由の生命林、

これを支那の言ばで吟じましよう、

一語亦披千萬心、尋來遠覺妙途深、

花無衰色香無老、筒是自由生命林、

噫、皇天上帝よ、願くは此稚な子を祝し、方今戦争的感情の如何に拘らず大國民たるの氣象を有せしめよ、願くは彼等をしてキリストの精き兵卒たらしめたまへ、

二羽の雀は一錢にて售に非ずや、然るに爾曹の父の許あくば其一羽も地に損ることあらじ、爾曹の頭の髪また皆かぞへらる故に懼る、勿れ、爾曹は多くの雀よりも優れり、然ば凡る人の前に我を識と言ん者、我も亦天に在す我父の前に之を識と言ん、人の前、我を識すと言ん者、我も亦天に在す我父の前に之を識すといふべし、

〔馬太傳第十章廿九節三十三節〕

又かれの演説に曰く、

諸君よ、キリストの仰しやりました言葉には、何を食ひ、何を飲み、何を衣んと思ひ煩ふ勿とござり升が、黃庭堅といふ子供は詩を作つて申しましたには、牛に乗て遠々前村を過す、

短笛横に吹いて隴を隔て、聞く、多少長安名利の客、機關用盡

して君に如かずと

皆さんが心配せず、に神の國どろの義きとを御求めなさるならば、ドツサリ好いものを下され升、ごらんなされ、神様はイエスキリストを下され升、たじや有ません乎、是れは一番好いもので御ざいます、其れ故に羊かひは大ろう、歡喜で奔走まはりました、

余が家兒の言論につき、同感同情を有する如く、神はキリストの道について同感同情を有し玉ひし、あらん、然り、余が家兒の演説に就きて責任を有する如く、神はキリストの説教に就きて責任を有し賜ふ、あらん、ヨハネ傳三章十六節云はすや、夫神は其生み玉へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し玉へり、此は凡て彼を信するものに亡ること無し、永生を受しめんが爲なりと。

新約聖書翻譯の由來

聖書は人類の大寶典なり、此寶典の我國語に翻譯されしは、實に一大事業なり、今新約聖書翻譯の由來を尋ねるに、實に明治五年九月廿日、神奈川縣横濱に於て、外國諸宣教師等の大集會を開く、固より其宗派の何たるを問ざるあり、而して此集會の中において、初めて聖書翻譯の議大ひに熟せり、則ち聖書翻譯委員五名を撰定す、其五名はドフチ、リフチ、ムド派よりはエス、アール、ブラチン、長老派よりはヘブン、組合派よりはクリーン、美以派よりはマコレイ、浸禮派よりはム、ブラチン、則ちこれなり、外に英國監督教會派のポルンサイド、バイボル、ライトの三氏は補助として之に加れり、また此等翻譯委員の上は、此翻譯事業一切のことを指揮監督するの委員を撰定し、これを常置委員と稱せり、此委員は當時日本在留の各派宣教師を代表する、一名つゝの代員を以て組立り、其人數すべて十一名ありき、爾後あらたに宣教師を派遣し、たるの宗派は望に

よりて此處に其委員を列せしむるの規定あり、此くて準備やうやく整ひし、のち殆んど二ヶ年の猶豫を経て、こゝに明治七年六月に於て、いよ翻譯の實地に着手せり、此時日本人にして此事業を助けしものは、實に松山高吉、奥野昌綱、高橋五郎、三輪某の四氏なりとす、就中、松山、奥野二氏の方あすかつて大ひなりと謂つべし、二氏なかつせば今日の聖書或はこれを見るに難からんか、二氏の功勞決して没すべからざるなり、然り而して、着手以來、こゝみ五ヶ年の星霜をへて、明治十二年十一月三日、則ち今より全十五ヶ年前、日本新約聖書翻譯全く成就し、越て翌年四月十九日、東京築地新榮教會に於て感謝の大會を開く、夫れ此國民万歳の寶典は此くの如くにして出生したるなり、



家庭の友

適當なる物

川石生

一耶「父様、貴父は先の内種々を面白い癖をして下さいましたのに、此節は少しもして下さいませぬ、今こゝして地爐に温めてゐながら、何か極面白く癖をして聞せて下さい、」

父「ヨシヨシ、承知した、何な癖がよいかね、」

一耶「父様、恐しい人殺の癖を、」

父「恐しい人殺の癖か、エート、或る時悪者が皆々同じ服装をして、」

一耶「黒い頭巾を深く被つて、」

父「イヤ、皆甲を被つていた、暗い藪の中からソツト出てきて右方に」

山寺の崖の下に付いてゆく、

一耶「其奴等はキツト悪い顔をした奴でしたらう」

父「私はソ一思はさいね、其反對で丈の高い立派な顔で普通のひとと少」

しも異はさい、ソレカラ忍び忍んで森の中へと込つて行た



一郎「ソレハ十二時の鐘が聞る真夜中でしたらう

父「イーエ所がソ一ではあいな、晴た静かあ夏の朝だ皆段々跡に續て進
で行く

一郎「静かに音のまゝい様にして土手の下に隠れながら、

父「所がソ一ではあいな皆大威張でズン／＼と行く静かにして隠れて
ゐようどはしあいで時々大きな聲を出したり又は鐘や大鼓を鳴
らして平氣である

一郎「それでは父様直に目付りはしませんか、

父「ウー、しかし皆隠れて居ようどもしあいで反つて面白さうに騒ぎ
あがら行く段々進んで行て或村へ來たら其處へ火を付けた、

一郎「村へ火を付けました悪い奴、

父「それから焼ている間に二萬人を殺してしまつた、

一郎「アハ、父様モ一分りました貴父は又た例の様に作り噺をおさる

のでしようが今度は詐かされませんか何ですか二萬人が黙つて立
ていて悪者に殺してもらつたのですか私にはソー思はれます、

父「イーヤ實に其人々は方の續く限り防いだのだ、

一耶「それでも父様如何して二萬人と云ふ様な大勢が殺されたの、
父「おせぬね悪者ハ三萬人居たのだもの、

一耶「ア一ヤット分りました、貴父ハ戦争の事をお談しですね、

父「其通りだ私はまだコンナ恐ろしい人殺を見た事がない、

眞實に火事です

數年前佛蘭西の或る芝居で恐ろしい騒動がありました、初めの一幕は
滞りなく大喝采を以て終りました満場の見物人は皆々熱心に次の狂
言を今か〜と待て居りました、すると當時最も人氣のある一番上手
な俳優が卒然舞臺へ走り出で、狂人の如き聲で火事だ〜と叫びまし

た。見物人は是を何かの狂言の詞だと思つて、皆一同に聲を上げて賛め
まして俳優の聲は消されてしまいました、俳優は益々大きな聲を出して
火事だ〜と呼びましても、誰も眞とは思はず唯拍手喝采を起す斗り
です、俳優ハ力一杯の聲を上げて眞實に火事があるのですと云ひ捨て、
見物人が賞賛の聲の中に樂屋へ引込んでしまいました、入換り具芝
居の座主が出てきて、皆さん眞と思ひませんかと云ひながら幕を啓け
て是れ此通り芝居が火事です、と云ふ聲の未だ終らぬ中、猛火烟々とし
て舞臺に起り、黒烟濛々として場内に巻き上りますれば、男女老幼狼た
い叫び、皆々先を争ふて出口へと逃げ出し、押し倒されて悲鳴を上げ、助
を乞ふものや、又た轉んだ人をドン〜踏越て行く者や、其混雜實に目
も當られぬ有様でした、漸くの事で逃げ出た人もありませんでしたが、大抵は
死んでしまいました、

此節多くの人々は、基督教の教師達が熱心に我等の救主イエスキリス

トの事を種々ど談しましても誰も信じません、それから人間はイエスキリストを信じませんならば神様の罰を蒙りまして死んでから限りない苦を受けるも云ふ事も信する人はありませぬ、されど此人等は丁度今此芝居を見てゐた人と同じ様に、後で狼い驚き遂に焼き殺されてしまふ事が必ずありませう、聖書約翰傳第五章二十四節に次の如く記してありませ

誠と實に爾等に告ぐ我言をきく我を遣し、者を信する者は永生を有かつ審判に至らず死より生に遷れり

虎勇威と畏る

大坂の城に能を催されし日にてありしが、半に込置し虎はなれて駆け出し、かば諸人魂を冷し、四角八方へ逃げちりける、秀吉公も御座を立せ玉ふ、大名小名も周章し玉ふと限りなし、然るに上座に秀吉公御次、伊達政宗、加藤清正をはしけるに、虎のいさはひかたり、秀吉公を目にか

け御前の椽に翔あがりしを、はたど睨ませ玉へば、暫く御顔をまもりけるが、椽がわを通り、政宗、清正の御方に向ひけるに、兩人膝を立てあをし、刀に手をかけたまへば、勢出せし虎すこくと庭へおりけるあり、實に大勇の威には、かゝる猛獸すら恐れけるかと、をのゝ感服せしとかや、

童子狼を殺す

丹後、岬山領の内にて、子供草をかりに行しに、狼の出しかば、みなく、遊びたりし、八才にある女の子、にげ兼て狼にとられしを、十一歳なる兄竹藏にげながら、之を見て取て、あへし、持たる鎌を狼の眉間にうちこみ、引けるに、鼻柱かけて切さきし狼は、嗷へし子を、一ふり振てすて、竹藏が頬さきにくらひつさし時、鎌をとりなをし、咽にうちこみ引しかば、狼忽ち死す、竹藏も氣絶し居けるを、人々走り來りて、薬を與しかば、蘇りし、舞月堂主人曰く、人には勇氣なくてはかまはぬものなり、勇は眞實無忘の心に存す、眞實無忘とは、一生懸命にして、毫末ほせも偽あきことなり、

世の小兒たちよ、勇氣は願さものにあらずや、さらば偽の心を棄れ、常に眞を有て、

司馬溫公の婦人六徳

柔順 柔順とは物やへらかにして慈悲ふかく、父母に順ひつかふまつりて能其ちからを盡すを云ふなり、

然るに女子は、夫の家に嫁すれば、父母につかゆる事かなはず、されば親の家にあるうちは、殊に父母に孝行を盡すべし、夫の家に嫁しては、舅姑につかふまつりて苦勞をかへりみづ、夫に順ひて志を盡すべし、

清潔 清潔とは、けがらはしき事を心に受いれず、邪なることを思はず、貞節を固く執守るをいふなり、

然れば女の身、とりわけ男女のわかち行儀正しく、うたがひを避け、人に耻しめを受けず、身の取まはし奇麗に心そなはにして、少しも後暗きことをせぬものなり、

不妬 不妬とは、夫に順ひて背き悖ることなく、我身を正しくして、人を隣み、たとい如何あるとあり共夫を恨み怒る心なきを云也、

女は心せばくして嫉妬ふかく、夫に不足を思ふ人多し、これ女第一のつゝしみ事なり、

儉約 儉約とは、我心を堅くひきしめ、少しも奢る心なく、衣服飯食よろづに恣なることをせぬと云ふなり、

然らば居所は云ふに及ばず、衣類とても恣に美はしきを着ず、食事もつゝしみて美あるを省き、何事も身の奢を退け、家内の者を見ろだて、或はうれひに逢る人、貧乏人をも恵み、夫の心届ざる所あれば、色をやはらげ聲を怡ばし、夫にのくと告て恵みあるべし、吝は必ず奢より出づ、心しわく、身の奢ある時は家を亡すべし、

恭謹 恭謹とは、容正しく、心を用ゆること油断なく、身を大切に執りまもるをいふなり、

萬事と一ろに怠さく、身持たしく、驕り高ぶること無きやうにと誠めたしむむべし、婦となりて驕り高ぶる時は子孫亡び身を失ふべし、勤勞とは人の婦となりての我身を夫に任せて、少しも私の心なく如何やうの苦勞ある事も、くろうと思はず、力を盡して勤

むると云ふなり。

然れば女の身にあす業口にいへる言夫の仰に背かず、家内の取廻し正しく、樂をもとめず、心をはげまし、夙も起き、夜半に寝ねて、身の及ぶ丈けを盡すべし。

一寸一言

問 迷ひの人は死んでのち幽霊になりて出ると申すが、基督教の信者は如何に考へますか。

答

私共は竟に幽霊に逢つたことが御座りませぬ故に、何んとも申すことは出来ませぬ、見ざるを云はず、知らざるを説すと、古人も教へられました、尤も死んだ幽霊は知らねども、生きた幽霊を存じてをります、かく申すと、さらば幽霊は生きてゐるゝの疑ひもありまじやうが、固より生きて居る幽霊がなければ、死んでから出様はづがない、人が死んだとて、幽霊を拵へて商賣ふ所はない、死んで出ます、幽霊ならば、生きて居る内から出ねば、あらぬ道理である、夫れ我身を暗きと陥れて、正道をふみ迷ひ、人を怨んだり、妬んだり、やみよりのやみにさまよふて、泣きの涙で此世を暮すが、此世からの迷ひも、の生きながらの幽霊で御座ります、ゆへ、未來も思ひやられます、死んでの後の迷ひより、生きて居る内、迷はぬが近道であります、基督教の語に、天國は近し、悔改めよと、悔改めが即ち迷ひはらしの第一着であります。

問答

基督教を信仰すれば、君に不忠になると申すが如何
 以ての外の間で御座ります私に答へる前に、先づあなたに
 一つの問をかけたと思ひます、東京の宮城は日本の内にありま
 すか、日本の外にありませうか無論日本の内にありませう、されば
 忠君は基督教の内合蓄をりませう、なせかとなれば、基督教は神
 を敬ひ、人の道を全ふせしむるを以て目的とするものなり、忠君は
 此人道中の一徳に外ありませねば、基督教の内、忠君をふくんで
 居る、無論の事でありませう、と日本國の内に東京城を含んで
 ゐると同じ理であります、其証據には、英國を御覽なさい、英國は上
 下擧つて基督教を信する基督教國であつて、而かも天子を上にい
 た、いく立憲君主國であります、しかして英國民が君に不忠なりや
 と云ふに決してそうではありませぬ、寧ろ日本人に優るとも、決して
 劣らざる、忠君愛國の情をもつてをります、此は明らかなる事實

にして、世界萬衆の認めて感心する所でありませう、されば基督教を
 信仰するが爲に、君よ不忠になるなぞ、は、理に於ても、實際に於て
 も決して有り得べからざる事でありませう、
 基督教の安樂とは如何なるもので御座りますか、
 基督教の安樂として別に奇妙不思議なものでも、何んでもありませ
 ぬ、基督教の語に、凡て勞れたるもの、又重きを負へるものは、我に來れ、
 われ汝等を息ませんと、又曰く、汝等心に愛ふる勿れ、神を信じ、又我
 を信すべしと、されば基督教の安樂とは、神を信じ、基督にたより、一
 切の我儘をすて、天意のまゝになるを、御座ります、到底人間が
 いくら肩臂張つて我をつのつても、天意にかつ事は出来ませぬ、然
 るに其克つ事の出来、天意に逆つても無暗に我を張り通そう
 とするが、人間性來の悪習であります、而して結句これが苦勞の元
 となりませれば、此悪習をドコまでも退治し、ひたすら信仰に基づ

問 答

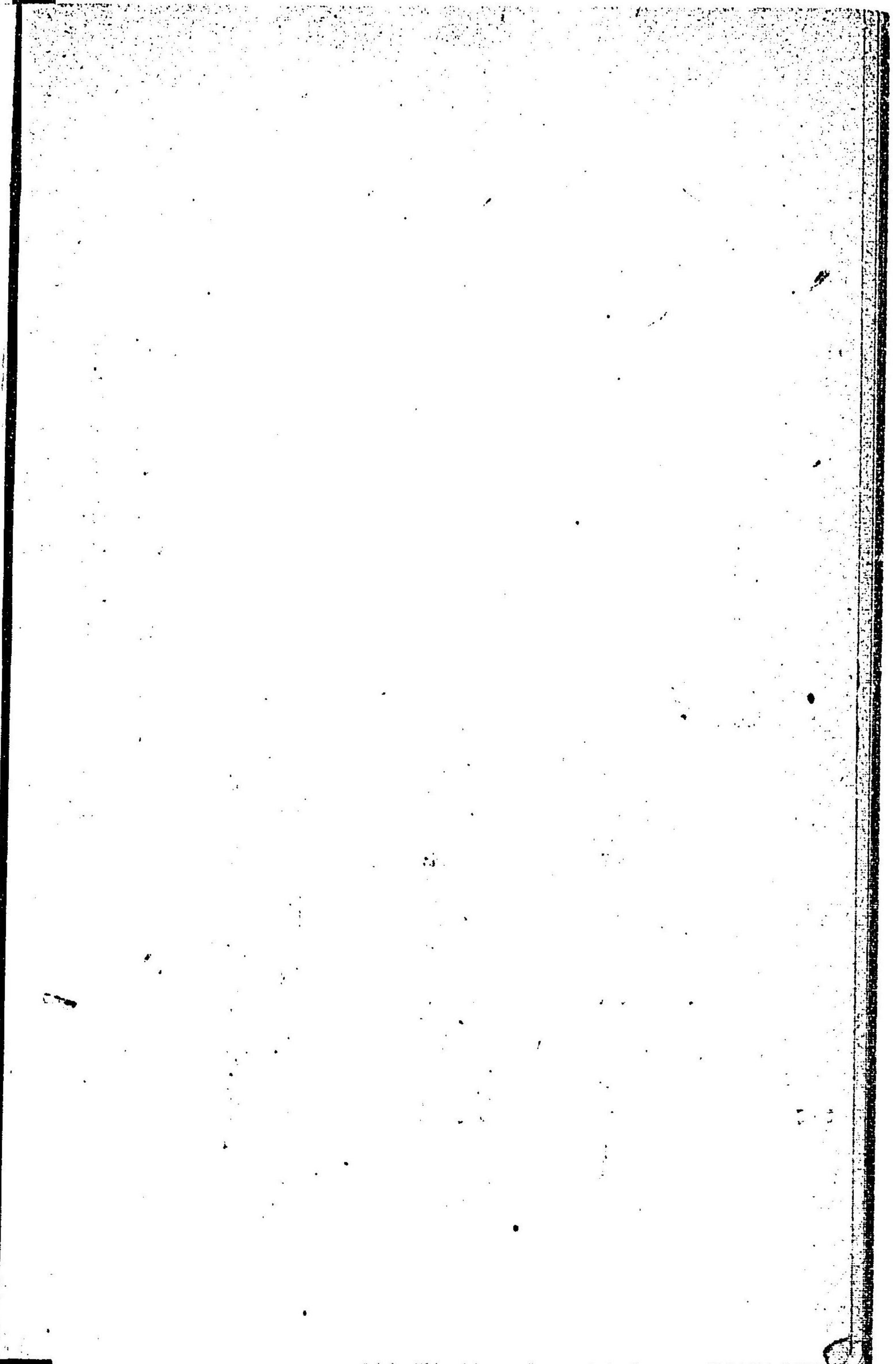
くのが、基督教の安樂であります、
 基督教の信者が祈禱をなすを見る毎に可笑しく感ずるは如何
 が、自然に泣き立つると同じ理あり、赤子は手真似にても、仕方にて
 も泣く事を他より教へられず、たい自然の儘おして、然るあり、赤子
 は泣きながら此世に來ります、恰も其如く、一旦基督教を信じ、舊き
 己を脱ぎ、新らしく生れかれば、祈禱は自然に、其本心深きとこ
 ろより湧き出るのであります、決して笑ふべきものではありませ
 ん、

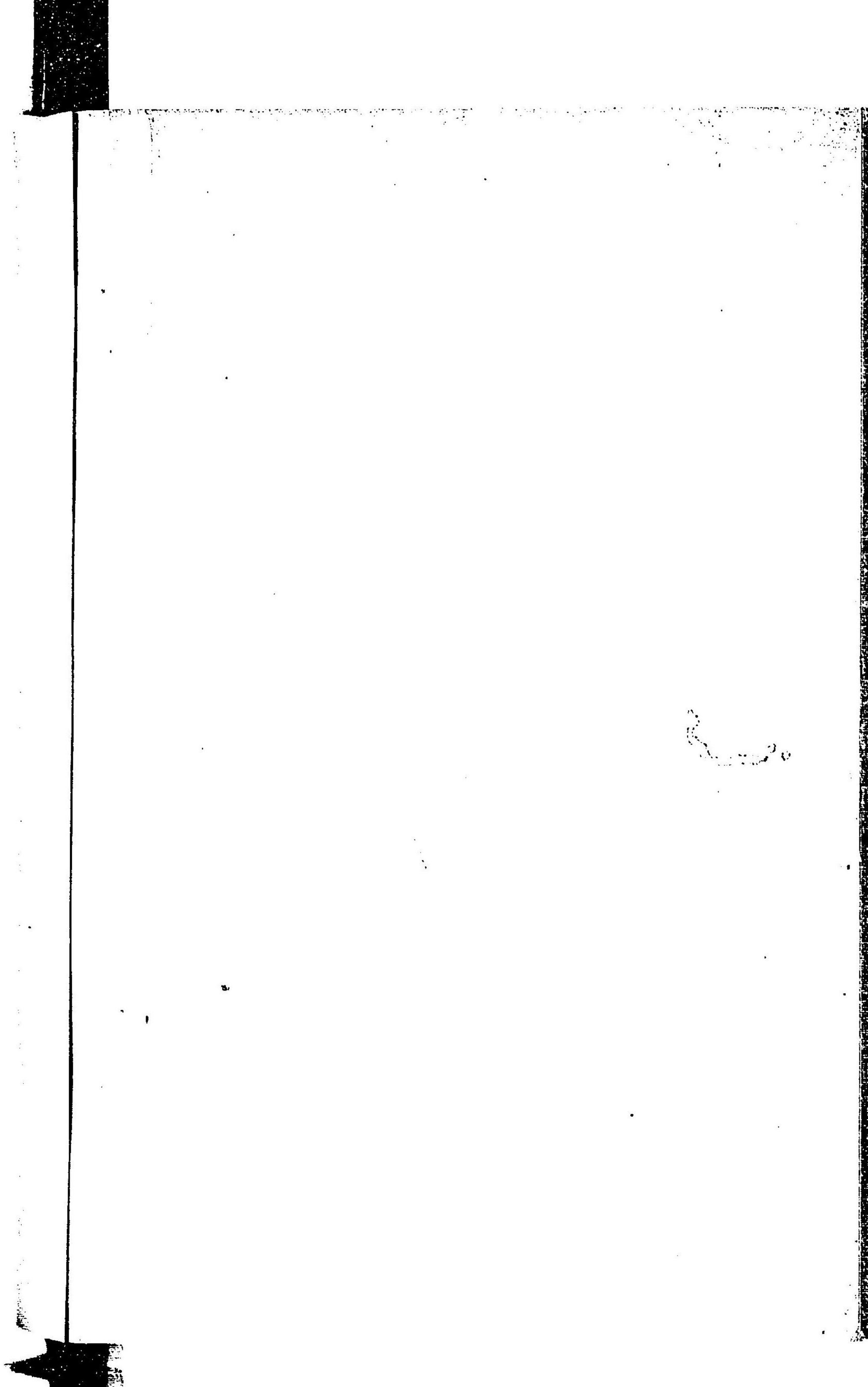
明治廿七年十二月廿五日印刷
 明治廿七年十二月廿八日發行

發行兼編輯人 松尾音次郎
 東京市麹町區上三番町十二番地

印刷者 富永寛容
 同 牛込區上宮比町四番地

印刷所 和合社
 同日本橋區北島町一丁目廿三番地







1954

特49

809

基督教の礎

国立国会図書館

020488-001-7

特49-809

基督教の礎 第2, 3輯

松尾 音次郎/編

1冊(58)

M27.28

ABI-0298

